岡崎市美博ニュース
【アルカディア】

Arcadia

OKAZAKI CITY MUSEUM NEWS

VOL.24

エッセイ
「創造する伝統」—なつかしい印象先生

『堂本印象　創造する伝統展』
伝統から創造へ

祈りの世界の動物たち展によせて

美博日記

堂本印象《訶梨帝母》
1922年（大正11）
京都国立近代美術館蔵

OKAZAKI MINDSCAPE MUSEUM
岡崎市美術博物館

ESSAY

「創造する伝統」―なつかしい印象先生

館長　芳賀　徹

私がはじめて堂本印象画伯におめにかかったのは、1960年（昭和35）前後のことだった。もう四十五年ほども前。遠い昔のことになる。

1960年でいえば、印象先生（1891～1975）は六十九歳。私は二十九歳で、フランス留学から帰ってもなんの定職もないまま大学院の博士課程を終えたところだった。

パリに留学中、少くともその前半は、私は宿舎の「日本館」（メゾン・デュ・ジャポン）で、印象先生の甥の堂本尚郎と同じフロアに暮らしていた。尚郎は1952年に伯父といっしょにヨーロッパ旅行をして後、日本画から洋画に転向してパリに定住し、1955年前後からはヨーロッパでも急速に勢いを得た「アンフォルメル」の前衛運動に加わろうとしていた。私も、同じく同宿の青年画家今井俊満とこの尚郎に誘われて、パリのアンフォルメルの牙城スタッドラー画廊にしきりに出入りするようになっていた。

スタッドラー画廊の専属顧問が批評家のミシェル・タピエで、彼はヨーロッパとアメリカの両大陸間を往復して、アンフォルメルの理論的指導と目利き役とを兼ねて大活躍していた。そのタピエが1957年秋にはじめて来日し、同行のジョルジュ・マチュウや今井とともに、日本にいわゆる「アンフォルメル旋風」を捲き起こしたことは有名である。私はタピエにわずかに遅れて帰国し、タピエたちの通訳兼相棒として大阪の「具体」グループの若い画家たちと大いに愉快につきあったりした。

ミシェル・タピエと堂本印象（中央の二人）
1958年（昭和33）堂本邸にて
【この場面手前側にいたはず、あるいは写真をとったのは自分だったかとの芳賀館長の談】

実になつかしいわが青春の1957年だが、その秋すでにタピエたちといっしょに、大阪からの帰りに京都で印象先生にお会いしたのであったと思う。尚郎が世話になっているということでか、印象先生とその実弟で尚郎の父の堂本四郎氏が、私たちを祇園の茶屋に招待して下さった。幾人ものきれいな舞妓・藝妓がはべったその夕食会のあとに、タピエとマチュウと私の三人は建仁寺を訪れ、管長の老師と禅問答を交わし、私がそれを通訳した。そしてそのまま三人、寺内の座敷に布団をならべて一泊した。翌朝は、庭の芝生に出された洗面器で顔を洗い、禅好きのフランス人二人が大よろこびしていたのを、私はいまもよくおぼえている。この建仁寺の体験も、印象先生の紹介によるものだった。

印象画伯の画風は、1950年代後半に入ると急

堂本印象『交響』紙本着色　1961年（昭和36）　京都府立堂本印象美術館蔵

印象が晩年自宅の隣に建てた堂本美術館（現　京都府立堂本印象美術館）【印象自身のデザインが壁面の装飾や建具、家具にまでおよんでいる。】

速に抽象画に変りはじめていたが、それはまだ二科会風ともいうべき半具象、ないし幾何学的抽象にとどまっていた。
それだけでもすでに、保守的な京都日本画画壇と愛好者層をおどろかすに十分であったろう。ところが、タピエとの接触の前後のころから、その画風はさらに大胆に抽象化して、いわば和風アンフォルメルに転化していった。

縦160センチぐらいのかなり大きな画面に、継色紙か経本のような美しい青や紫や紅の地色が濃く薄くひろがり、その真中に太い墨の線がリボンか組紐のように幾重にもからまって渦を描く。そしてその渦の上やまわりには金粉が星雲のように散りひろがる。――これらの作品は、いま眼のあたりにしても、ましてあの1960年前後の京都を思えばなおさらのこと、実に思い切ったあざやかな転身であったと、驚かずにはいられない。

仏画を描いても、風景や婦人風俗を描いても、あれほど完璧で、古典と現代の最高の画法と様式を使いこなしていた印象先生が、六十代後半の歳でせっかく京都画壇の重鎮の身にありながら、いまさらなんでこのようなわけのわからぬアンフォルメルとかに変身なさったのか、と、京都の人々のみならず、東京の日本画関係者まで、みな呆れたり、惜しんだりしたにちがいない。

ところが、当の印象先生は世間の雑音には恬然としていっさい動ぜず、かえっていっそう果敢に、いよいよ若々しく、和様アンフォルメルを荘厳化し、抽象仏画さえ描き、西芳寺や法然院のあの抽象琳派ともいうべき華麗多彩な襖絵をつぎつぎに制作していったのである。その間に、パリのスタッドラー画廊で二回（1959、1962年）、タピエが創設したイタリア・トリノの国際美学研究センターで一回（1961年）と、海外での個展をも開催した。戦後京都で、依然異彩を放ちつづけた古典の前衛派、まさに「創造する伝統」の体現者が、印象画伯であったといえよう。

タピエは57年以後も毎年のように一人で、あるいは面白い画家たちを同行して来日し、私はそのたびにいっしょに行動した。ある年の秋には、衣笠の堂本邸に彼らとともに招かれて、印象先生秘蔵の平安の名筆の歌の色紙を座敷の床の間で拝見したりした。またある年の冬は、祇園の真中の日本旅館に私が一人で泊っていると、はなやかな舞妓さんたちが三人ほどもにわかに私の部屋に遊びに来て、いっしょのこたつでしばしにぎやかなおしゃべりをしたりした。あれも実は印象先生と四郎氏の心づかいであったのだろう。実になつかしい印象画伯である。

堂本美術館　ロビー部分

EXHIBITION

伝統から創造へ
―堂本印象　創造する伝統展―

会期　平成17年4月9日(土)～5月15日(日)

学芸員　荒井　信貴

4月9日からの堂本印象展を控え、日本を代表する古都京都を訪れる機会がふえています。JR京都駅に降り立つとまずその巨大な駅ビルに驚かされます。平安建都1200年記念事業の一環として建てられた4代目の駅舎で、「京都は歴史への門である」をテーマに建築家原広司が設計にあたったものです。烏丸通と室町通に面して門が開いていますが、どこか薄暗い空間の重圧は、黒澤明監督の映画『羅生門』のイメージに繋がっていきます。京都の玄関口に現れた現代的な建物―それは単に伝統を固持するだけではなく、このまちが絶えず新しい文化を受け入れる日本の窓であったことを思い出させてくれます。

今回の堂本印象（1891～1975）展開催にあたっても、一際高い関心を呼んだのがこの京都のまちと人、そして画家との関係です。もちろん古典的画風から戦後は西洋画的な絵を描き、そして60歳後半になって抽象画に挑戦する印象の生き方も非常に魅力的ですが、京都画壇の重鎮がこれに挑み、またそれを受け入れていく人々がいたことが特に興味深かったのです。最初に大きな感銘を受けたのが、諸般の事情から今回の展覧会には出品されませんが、京都国立博物館や三十三間堂にとなりあう真言宗智山派の総本山智積院の襖絵です。長谷川等伯の手になる国宝『松に草花図（松に立葵図）』『桜楓図』『松に梅図』などの障壁画で有名なこの寺ですが、新しく建てられた宸殿（客殿）に1958年（昭和33）、印象が描いた5題26面からなる作品群です。『茄子に鶏』『流水に鳶』などの水墨淡彩画はいかにも寺院らしく思われますが、それらの中にあって一際異彩を放つのが『婦女喫茶』と名づけられた4面です。2本の木の間に置かれたテーブルをはさんで和装と洋装の女性がゆったりと向き合っています。周囲には木々や刈り込み、提灯も吊り下げられ、これらが金地の上に極彩色で形もデフォルメされて描かれているのです。「これからの寺院は開かれたものでなければならない。」と語ったという当時の管長の思いと印象のコラボレーションが寺院の伝統空間に新しい風を吹き込んだものです。そういえば画面の中の和装の女性が椅子に座りお茶をたてているのも、立礼式という作法によるもので、伝統的な裏千家に変革をもたらした奥殿藩出身の玄々斎がはじめたものです。

堂本印象は、1925年（大正14）大徳寺内の龍翔寺書院に山水の襖絵や仙人の杉戸などを描いたのをはじめに、600面を超える障壁画をその人生でものにしています。中には最高裁判所や大阪カテドラルのマリア大聖堂壁画などもありますが、そのほとんどが寺社の襖や柱、天井に描かれたものです。1930年代には、仁和寺、東福寺、教王護国寺（東寺）、信貴山、醍醐寺と毎年のように有名寺院の障壁画を描き、戦災で惜しくも焼失してしまいましたが、四天王寺宝塔内陣では純然たる仏画大作をものしています。印象の側からすれば、油ののった多忙きわまるこの時期、あえて大作に挑んだのは、自身の厚い信仰心によるものといえますが、一方、画家に大作を描く機会を与え、絶えず支援する寺院の姿も見逃せません。戦後も数年おきに描き続けて、奈良・京都のみならず徳島、高知、岐阜、東京と広がりをみせています。そこに描かれた画題は、大きくは自身の画風の変遷と同じですが、あるときは水墨の山水、あるときは桃山の琳派の華麗なものと、印象のもてる技を駆使しています。
今回の展示で紹介する襖絵は京都の二か寺からお借りしたものです。

西芳寺は京都の西の丘陵部、酒造りの神様として知られる松尾大社の南にあり、奈良時代に行基が開創したといわれる古刹です。一時衰えたものの室町時代に夢窓疎石を迎え禅宗寺院として再興しました。夢窓の手になるとされる庭が、水位の高い地下水が苔を育み通称「苔寺」として非常に名高

西芳寺西来堂外陣の『遍界芳彩』

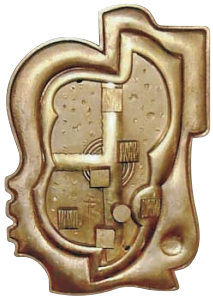
堂本印象『婦女喫茶』紙本着色襖4面　1958年　智積院蔵

い寺です。応仁の乱で主要堂塔が焼失し、明治になって建てられた本堂「西来堂」を飾るのが印象の襖絵（1969年）です。外陣には『遍界芳彩』。まばゆいばかりの金地に、正面には白、青、朱などの色が、小さくまとまって点在し、両側には、多彩な色の帯や円が大きくうなりを見せています。図録で見た限りでは、仏間には不釣合いに思えますが、本堂の広い空間にぴったり収まり、荘厳するという言葉が仏教で使われていることを思い出させます。次の間の『無機』はこの時期の印象の抽象作品と同じで、金と墨をもちいた書に通じる作品です。一番奥の間の『拓音充光』では再び華麗な色彩が舞います。この堂は、見学者が写経し法話を聞くのに使われており一般の人でも申し込めばその名園とともに拝観できます。

法然院は、京都の東、鹿ケ谷の地にある浄土宗寺院で、法然が念仏を唱えた地に江戸時代になって建てられたもので、四季折々の風情を映す閑静な佇まいを見せています。後西天皇皇女の御殿を移したとされる方丈には、狩野光信筆の重要文化財の襖絵がはめられています。狩野派の襖絵の向こうを張り、印象の『静風自来』『快風悦水』『古徳安道』『浄妙慶處』と名付けられた一連の作品が次の間に描かれています（1971年）。金地に墨に色彩が加わるとともに晩年の具象的な要素がもどり、木々や葉がデフォルメされて表現されています。今回の借用は、一般公開の時期に近いため、同時期に描かれた望西閣と呼ばれる客殿の2階にしつらえられた襖絵10面です。名前の通り吉田山を前に京都のまちを見下ろす眺めのよい8畳間2部屋で、本堂の緊張感とは異なり、くつろぎの空間を生み出しています。『香雲満堂』は墨と金の表現に淡く澄んだ色がのせられ、『雲華西来』は白とオレンジ色の対比が暖かい雰囲気を出しています。西芳寺、法然院とも印象自らによる引き手のデザインにも注目してほしいものです。

「創造する伝統」というサブタイトルは、単に堂本印象の画歴にたいしてだけではなく、それを支えた伝統的な寺院との共同作業をも示しています。伝統を見る目は、それを知り尽くす内に向かう目とともに、幅広く外を見渡す目が重要であり、さらに外から内を見直す冷静な目が必要であり、これこそが新たなる伝統へと繋がることを印象と寺院の共鳴は教えてくれています。このサブタイトルが、家康生誕地としての伝統をスローガンに掲げる岡崎のまちへの新たな視座になればとも思っています。

法然院望西閣襖絵『雲華西来』（手前)と『香雲満堂』（奥）



西芳寺襖の引手金具

EXHIBITION

テーマ展『祈りの世界の動物たち』

会期　平成17年5月21日(土)～6月26日(日)

学芸員　浦野　加穂子

『興福寺国宝展』（2月11日～3月27日開催）で奮闘中の浦野学芸員に5月21日から開催されるテーマ展『祈りの世界の動物たち』について聞きました。

Q この展覧会のテーマとみどころについて教えて下さい。

A 今回の展覧会では、私たちの身近な存在である動物をモチーフにした造形に焦点をあてます。昔から人間と動物の関わりは深く、人は身近な存在である動物を彫刻・絵画・工芸など様々なかたちで表現してきました。動物は私たちの日常生活のなかで家畜や労働力またペットとして親しまれるだけでなく、民話や伝説にも頻繁に取り上げられ、さらに信仰の世界では、仏に仕え、守護する霊獣として、また神々と私たちの仲立ちをする使いとして崇拝され、ときには聖なる力の象徴として礼拝対象ともなっています。

本展では、獅子・狛犬・象・馬・蛇・龍など仏教・神道等の宗教美術を中心に、動物が造形化され始めた古代の水鳥や馬などの動物をかたどった埴輪や鏡なども含めて一堂に展示し、その歴史的変遷をたどるとともに、それぞれの動物の特徴や役割、深遠な信仰のなかでの存在意義を系統的に紹介します。

『馬形埴輪』　5世紀末頃　外山3号墳出土

Q 仏教美術に興味を持ち、本展を企画しようと考えたきっかけは何ですか。

A 小学生の頃、家族と奈良や飛鳥へ旅する機会があり、寺院の静謐で落ち着いた雰囲気のなかで見る、みほとけの清らかに理想化されたお姿、慈しみに満ちたまなざしや微笑みなどに子どもながら魅せられました。その後様々なみほとけがおられ、それぞれのお姿には仏教の深い意味があることを知り、厳しさとやさしさを併せ持つみほとけの多様な造形表現とともにその基にある仏教の教義や世界観、また寺院の歴史や社会的役割などにも関心を抱くようになりました。

今回は、みほとけをとりまく世界の中に数多く登場し、

『涅槃図』　石川貫河堂筆　江戸時代
岡崎市指定文化財　竜泉寺蔵

側に仕えるなど重要な役割を果たすとともに、私たちの生活の中でも身近な存在である様々な動物たちの存在に注目して、本展を企画しました。

Q 来館される方々へのメッセージを。

A 今回は、宗教美術のなかの動物表現を取り上げますが、様々な動物の造形には、いにしえの人々の動物への畏怖のまなざしや愛情を感じることができます。現在、様々な場面で人と動物との共生が問題になっていますが、今回の展示を通じて、私たちが生活するうえで、かけがえのない存在である動物たちとの関係を改めて考えて直して頂くきっかけとなれば幸いです。

また、私たちに親しみ深い動物の造形を通して、堅苦しく考えられがちな宗教美術に多くの方々が興味を抱いて頂ければと思います。

『黒漆嵌装舎利厨子』　室町時代
岡崎市指定文化財　大樹寺蔵

美博日記

◇1月10日

先回のアルカディア紙上で館長が紹介しました菅原健彦さんのアトリエを訪ねました。場所は滋賀県大津市。比叡山から琵琶湖へと幾筋も延びる丘陵の尾根上、その先には堅田の浮御堂が静かに湖面に姿を映しています。南側斜面には住宅地が一面に広がり、まだ新築の家々が建ち並んでいますが、一歩奥へ入ると、辻々に石仏の祀られた祠が見られる古い集落が叡山へと抜ける街道沿いに並んでいます。その中の一軒、古い民家に手を入れた母屋に、長さ15m近いプレハブ造りのアトリエが建てられているのが菅原邸です。繊細な風景を描く日本画家として注目を集める奥様菅原さちよさんの出迎えを受け、菅原さんとアトリエへ。一歩入るとそこにはたくさんのスケッチと画材、奥には作品が立てかけられ、いかにも仕事場といった感じです。下書き段階から、裏面への彩色、木枠への貼り込みから本格的な制作にいたる過程の説明を受け、大胆な画面構成の中にも緻密な配慮が隅々までいきわたっていることを知ることができました。作品購入の話を進めていますので、平成17年度中には美術博物館での展示が実現することと思います。

筆をもつ菅原さん

菅原さんと芳賀館長

◇2月2日

美博周辺にこの冬はじめて雪が積もりました。広報担当の澤田さんがさっそく外に飛び出し写真を撮ってきました。ピンと張り詰めた冷気の中、鳥の声だけが木霊し、恩賜池をめぐる自然に映える雪は一幅の山水画を見るようです。またアトリウム正面の池にも薄く氷がはり、無機的な無音の世界が広がっています。普段とは違った様相を見せる美術博物館周辺の一面です。

雪と氷と静寂の美博

◇3月9日

「興福寺国宝展」の開幕に先立ち、弥勒菩薩像の前で多川貫主をはじめとする興福寺僧侶のみなさんにより法要が営まれました。普通の展覧会では、仏像の輸送に際しては生を抜いてから運び、展覧会中はそのままで、お寺に帰ってふたたび生を入れるのが一般的ですが、今回は輸送中だけ生を抜くという条件で貴重な文化財をお借りしています。

静まりかえった展示室の中、花びらの形をした白い紙をまく散華により厳かに法要ははじめられ、そして声高らかに声明が唱えられていきます。その声の連なりは、まるで男声合唱を聞くように非常に音楽的なものでした。電子音楽など日本の前衛音楽のさきがけとなった作曲家黛敏郎が、フランス留学から帰国して後、日本の伝統的な音の世界である声明に魅せられ、自身の曲に取り入れていったのがよくわかります。この時だけは一瞬展示室がお堂の中のように思え、周囲に並ぶ仏像たちが単に美術作品としてのみならず、長い歴史を辿り、多くの人々の信仰を集めてきた日本人の心の文化を内包したものであることが実感させられました。

（以上　A.N記）

多川貫主による開眼法要

INFORMATION

■展覧会スケジュール

2004年4月9日(土)～平成17年5月15日(日)

堂本印象―創造する伝統展

京都画壇を代表するひとりとして知られる日本画家堂本印象は、戦前はその伝統的土壌におけるスターとして活躍、戦後は、社会性の強い作品により新風を巻き込むとともに、さらに抽象画へと画風を飛躍させていきます。京都の古刹の襖を飾る抽象画に見られる「創造する伝統」とも呼べるその画業の軌跡をたどります。

2004年5月21日(土)～平成17年6月26日(日)

祈りの世界の動物たち

仏教や神道などの宗教美術の中には、様々な仏や神とともに多くの動物が登場し、重要な役割を果たしています。本展ではこの様な動物たちに焦点をあて、その特徴と深遠な信仰のなかでの存在意義を紹介します。

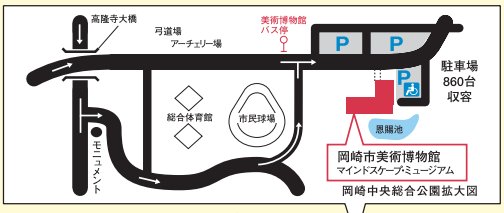
2004年7月3日(日)～9月4日(日)

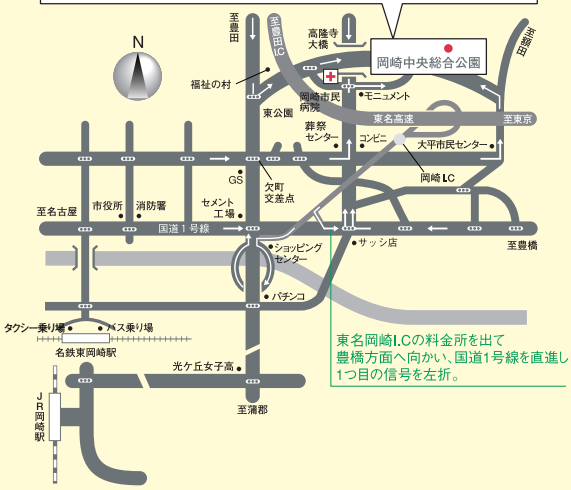
ハンス・アルプ展

ドイツ、フランス及びアルザス地方土着の文化が混交するストラスブールに生まれたハンス・アルプ。彼は、ダダ、シュルレアリスム、抽象-創造等の前衛芸術運動に関わりながら、画家、彫刻家また詩人として独自の制作を展開しました。アルプ美術館の全面的協力を得た本展では、「偶然の法則」「幾何学-シンメトリー」等、彼の作品を特徴付ける8つのテーマを設け、およそ180点に及ぶ多彩な作品を紹介します。

●開館時間／午前10時～午後6時(6月1日～9月30日)
午前10時～午後5時(10月1日～3月31日)
午前10時～午後8時30分(6月～11月までの土曜日)
〈入館は閉館時間の30分前まで〉
●休　館　日／毎週月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日)
年末年始(12月28日～1月3日)
※展示替えのため臨時休館することがあります。

◎公共交通機関／名鉄東岡崎駅バスのりば②より25分、
(名鉄バス)　「中央総合公園」行「美術博物館」下車徒歩3分
◎タ　ク　シ　ー／名鉄東岡崎駅から約15分
JR岡崎駅東口から約20分
◎自　家　用　車／東名高速道路・岡崎I.Cから約10分





OKAZAKI
CITY MUSEUM

【岡崎市美博ニュース／アルカディア】
●Arcadia　第24号　●2005年4月発行
●編集・発行　岡崎市美術博物館(マインドスケープ・ミュージアム)

岡崎市美術博物館
〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町峠1 岡崎中央総合公園内
TEL0564-28-5000(代表)
ホームページ　http://www.city.okazaki.aichi.jp/museum/ka111.htm

発注など経理で本紙を支えてくれていた近藤主任が別の課へ。「ご苦労様でした。」人事の話で年度替わりを実感する今日このごろです。デザイナーも清水郁美さんに替わり新しいスタートです。
(A.N)

PRINTED WITH SOYINK
R100 本紙に古紙配合率100%再生紙を使用しています。